

心の栄養剤No127 【ある先生と子供の出会い】

その先生が5年生の担任になった時、一人の服装が不潔でだらしなくどうしても好きになれない少年がいた。

中間記録に先生は、少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。ある時、少年の1年生からの記録が目止まった。

「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強もよくでき将来が楽しみ」

とある。間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。

2年生になると・・・

「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」

3年生では・・・

「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りする」

3年生の後半の記録には・・・

「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」

4年生になると・・・

「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子供に暴力をふるう」

先生の胸に激しい痛みが走った。だめと決めつけていた子が突然深い悲しみを生き抜いている生身の人間として、自分の前に立ち現れてきたのだ。先生にとって目を開かれた瞬間であった。放課後、先生は少年に声をかけた。

「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない？」

「わからないところは教えてあげるから」

少年は初めて笑顔を見せた。それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手をあげた時、先生に大きな喜びがわき起こった。少年は自信を持ち始めていた。クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。あとで開けてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気がつくとも飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。

「ああ、お母さんの匂いだ！きょうはすてきなクリスマスだ」

6年生では先生は少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。

「先生は僕のお母さんのようです。そして、いままで出会った中で一番すばらしい先生でした」

それから6年。またカードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。僕は5年生で先生に担任してもらってとても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することができます」

10年を経て、またカードがきた。

そこには先生と出逢えたことへの感謝と、父親に叩かれた体験があるから、患者の痛みがわかる医者になれると記され、こう締めくくられていた。

「僕はよく5年生の時の先生を思い出します。あのままだめになっ
てしまう僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。

大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、5年生の時に担任して下さいました先生です」

そして1年。届いたカードは結婚式の招待状だった。

「母の席に座ってください」

と一行、書き添えられていた。

たった一年間の担任の先生との縁。

大好きな話で、何回読み返しても、そのたびに胸が熱くなります!!

人は誰でも無数の縁の中に生きていて、私自身も人生において、過去も現在もそして未来も、いろんな縁～いろんな出逢いの中で生きて来たとし、これからも生きていくはずですよ!!

大切なのは、与えられた奇跡とも言える縁～出逢いに感謝の気持ちを持って、どう生かしていくかだと思います。

新しい出逢いの多い“春”。皆様におかれましても人生を开花させていくような素晴らしい出逢い～ご縁に回り逢い、心まで暖かく明るい春を迎え過ごされます事を、心よりお祈り申し上げます!!

